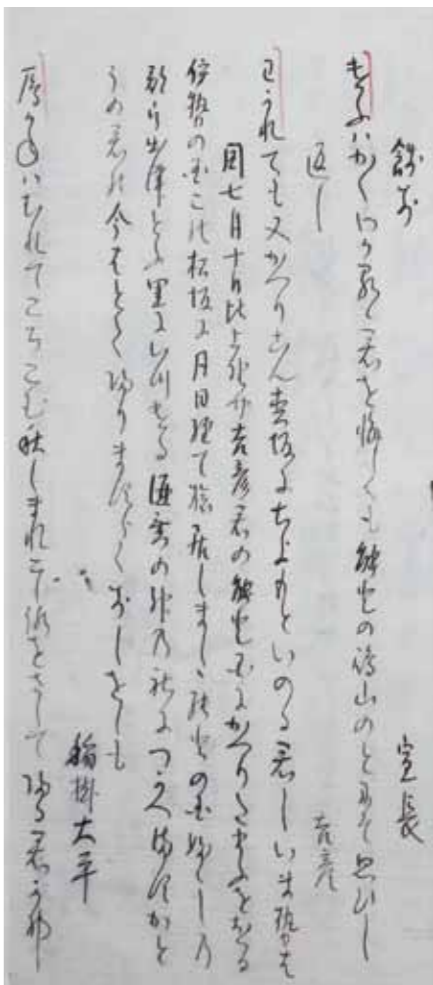


千尋の浜草

加藤三千雄さんがたどる先祖・吉彦の鈴屋入門

旅日記⑫ 別れの饞別として宣長と歌を詠み合う



『千尋の浜草』最終頁 宣長、学友たちと歌を交わすくだり（訳は本文参照）
吉彦は自身の名前を、師宣長、稲掛（本居）大平の名前より一字下に配する



鈴屋（本居宣長記念館）に遺る吉彦自筆の短冊
わかれても 又帰りこんまつさかに 千世もといのる 君しいませは 吉彦

吉彦は、2カ月半に及ぶ「お国学び」の留学を終えて帰郷するにあたって「後の7月9日（旧暦には3年に一度、閏月がある）」からその準備をはじめました。師や学友はもちろん、もぐさで生計をたてる朝顔好きの竹屋嘉右衛門、近所の狂歌好きの染物屋のおっさん桔梗屋半兵衛などなど、お世話になった人に歌を贈呈し、挨拶まわりを済ませました。伊勢山田の山口久貞家に留まり、ここで写本などを整理し荷造りしたようです。

「後の7月17日」、改めて別れの挨拶をするために、松阪の鈴屋を訪ねて、さらに授業料2分（今の2万円前後）を納めています。いよいよ宣長の妻女や下女に見送られ、能登へ旅立ちました。吉彦の帰郷にあたり、送別会を催したかは定かではありませんが、宣長をはじめ学友たちは饞別として歌を詠み合った、と記しています。

饞別 宣長
けふはかく わかるる君を悔しくも
能登の嶋山のとにぞ思ひし
返し 吉彦
わかれても 又かえりこむ松坂に
千世もといのる 君しいませは

「閏七月十日頃 上野介吉彦君の能登国に帰りましたまふをおくる 伊勢の国この松坂に月日経て旅居しました能登の国鳳至の郡・宇出津といふ里にいつける 酒垂の神の社に仕えます 加藤の君の今はとて帰りますらく別しをしも」

高弟である稲掛大平、殿邑安守、中津元義、孝寿の饞別歌を書き記し、この紀行文・千尋の浜草を閉じています。吉彦が宣長に詠み返した短冊は、今でも鈴屋・本居宣長記念館に遺されています。

加藤吉彦の自著、写本は現在、宇出津城山の能登町歴史民俗資料館に展示公開されています。



寛政の旅人：加藤吉彦（かとう・えひこ）。寛政9（1797）年、36歳の時、伊勢の本居宣長の元を訪ね入門。酒垂神社 12代宮司。
平成の旅人：加藤三千雄（かとう・みちお=写真）。現酒垂神社宮司。9代前の先祖、吉彦の道中を実際にたどり、伊勢松坂で吉彦と宣長の交流の跡を目の当たりにした。

「広報のと」12月号の印刷費は一部当たり34円です。



広報のと 第118号

平成26年12月1日発行

発行・能登町 編集・広報情報推進課
〒927-0492 石川県鳳珠郡能登町宇出津新1字1-97番地1

☎：0768-62-10000
能登町URL：http://www.town.noto.lg.jp
Eメール：info@town.noto.lg.jp

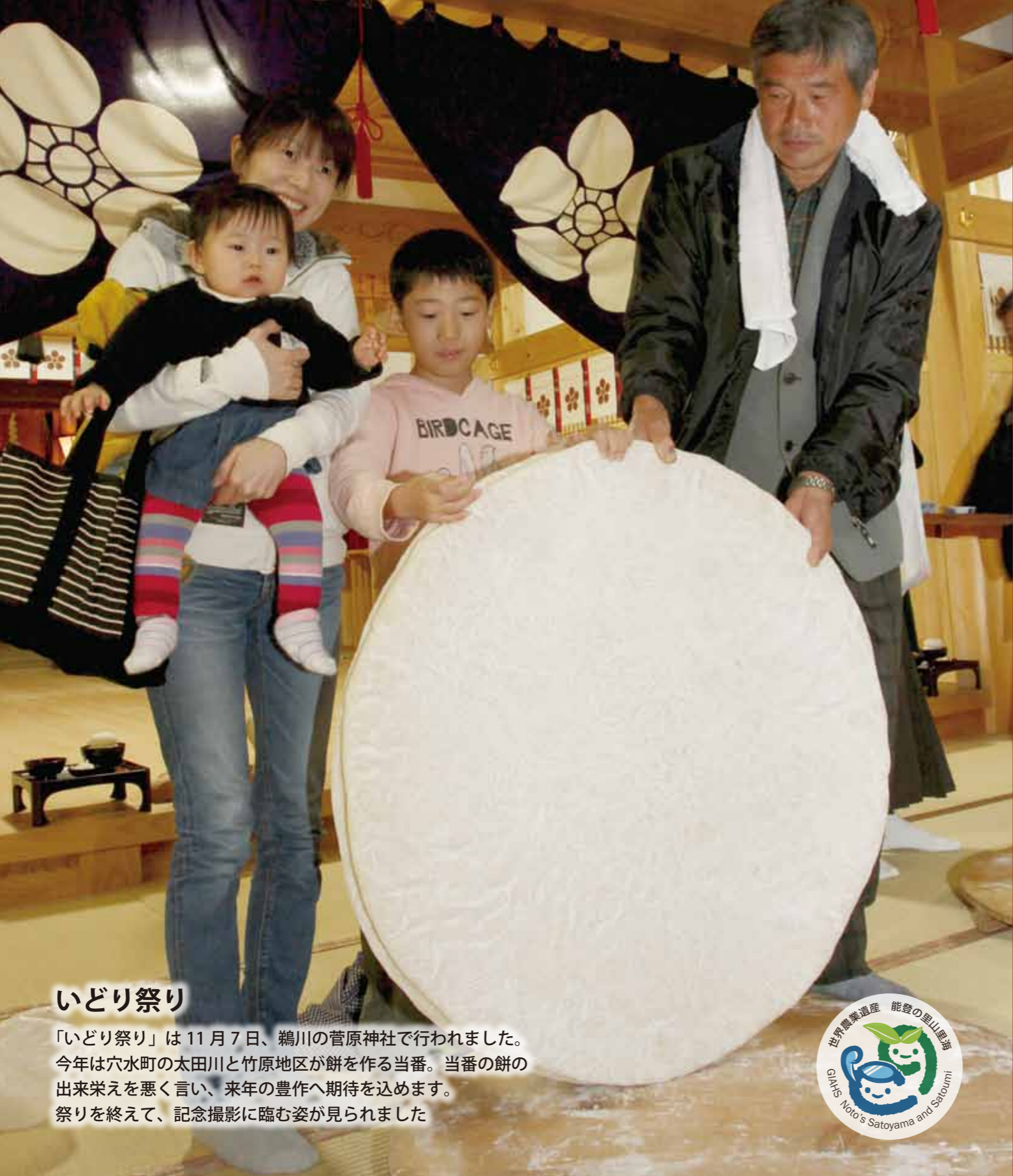
広報のとNo.118
2014.12.1

12

「行政」「人」「地域の魅力・価値」を「プラス」でつなぐ情報誌

PLUS

NOTO



いどり祭り

「いどり祭り」は11月7日、鶴川の菅原神社で行われました。今年は穴水町の太田川と竹原地区が餅を作る当番。当番の餅の出来栄を悪く言い、来年の豊作へ期待を込めます。祭りを終えて、記念撮影に臨む姿が見られました

